

◆奨励賞◆

ジェンダー・ギャップを考える

中原 中学校 二年

黒田 凜 空

「男の子なんだから、泣かない。」

「女の子なんだからきちんと座る。」

こんな言葉を聞いたことはないでしょうか。では、男の子はきちんと座らなくて良いのでしょうか。女の子はいつでも泣いて良いのでしょうか。僕たちは日常生活を送る中で無意識のうちに「男性はこうあるべき」、「女性はこうあるべき」というイメージをもっているのかもしれない。

世界経済フォーラムが発表した二〇二四年版「ジェンダーギャップ・レポート」の男女平等度ランキングで、日本は一四六カ国中一一八位でした。昨年度の一二五位よりはわずかに順位を上げていますが、下位グループを抜け出せず、世界から取り残されています。教育や医療へのアクセスでは男女平等をほぼ達成していますが、政治、経済の分野で遅れをとっています。厚生労働省が発表したデータによると、月の平均賃金は、男性三十四万二千円、女性二五万九千円となっています。格差は年々小さくなっていますが、男性を一〇〇としたとき、女性は七五・七という数字をみると、格差はまだ大きいと言えます。

ジェンダーレスへの動きはいろいろな所でも見られます。今年の六月に僕たちは校外学習で東京スカイツリーを訪れました。そのとき、ユニフォームがリニューアルされたことを知りました。女性スタッフはスカートと、

パンツスタイルを自由に選べるようになりました。また、僕が通う中原中学校でも昨年度、女子がスカートとスラックスのどちらかを自由に選べるようになりました。これまで、ルールだから、制服だからということで、がまんしていた人がいたと思うと悲しくなります。他にも僕たちが気づいていないところで困っている人がいるかもしれません。

実は、このコンクールの題名にも僕なりの主張があります。「少年の主張 作文コンクール」とありますが、これでは、少女は応募できないようにも読めます。ここは「少年少女の主張」または、「子どもの主張」とする方が時代の流れに合っているのではないかと思います。三十七回という歴史あるコンクールだからこそ、ここでコンクール名を変えてみるのはいかがでしょうか。

差別は制度や伝統を変えることに目がいきませんが、本当に大切なのは僕たちの心にある差別や、偏見などの勝手なイメージを変えることなのだと思います。これからも自分の心の中にあるイメージが本当に正しいのかを考えながら今ある制度や伝統を変える勇気を持ち続けたいです。

だれだって泣いていい。
だれだってきちんと座った方がいい。